



**Data**

監督：ケイト・ショートランド  
脚本：エリック・ピアソン  
出演：スカーレット・ヨハンソン/  
フローレンス・ピュー/デビッド・ハーバー/0・T・ファグベンル/ウィリアム・ハート/レイ・ウィンストン/レイチェル・ワイズ

### ■■■ショートコメント■■■

◆私は「マーベルコミックもの」や「アメコミもの」は嫌いではない。むしろ、『スパイダーマン2』（04年）（『シネマ6』14頁）、『スパイダーマン3』（07年）（『シネマ14』222頁）、『アイアンマン2』（10年）（『シネマ25』未掲載）、『X-MEN：ファイナルディビジョン』（06年）（『シネマ11』404頁）、『ハルク（HULK）』（03年）（『シネマ3』107頁）、『ファンタスティック・フォー』（05年）（『シネマ8』131頁）等、それらの作品を私は結構よく観てきた。しかし、それらのキャラを終結させた『アベンジャーズ』（12年）になると、さすがに、「またか!」となり、『アベンジャーズ エイジ・オブ・ウルトロン』（15年）（『シネマ36』未掲載）が私の最後になった。

しかし、アベンジャーズの一員ながら、スカーレット・ヨハンソン扮するブラック・ウィドウの女スパイ、ナターシャ・ロマノフに焦点を当てた作品ともなると、そりゃ必見！事前の情報によると、『エンドゲーム』（19年）でナターシャは死亡したはずだが、その葬儀が劇中で描かれることはなかったらしい。それはなぜ？そりゃきつと・・・。

◆『真珠の耳飾りの少女』（03年）（『シネマ4』270頁）で強い印象を残した女優スカーレット・ヨハンソンを、ウッディ・アレン監督は『マッチポイント』（05年）で主役に抜擢したが、同作のスカーレット・ヨハンソンは前半と後半で全く別人のような見事な演技を見せていた（『シネマ15』129頁）。このまま順調に成長すれば、第2のケイト・ウィンスレットに！私はそう期待していたが、『アイアンマン2』にブラック・ウィドウ役で登場すると、以降「マーベルコミックもの」に取り込まれてしまったかのように、その手の役が増えていった。

別にそれが悪いとは言わないが、そのままいけば「第2のミラ・ジョヴォヴィッチ」のようなアクション路線一辺倒になってしまい、せっかくの演技派としての能力を狭めてしまうのでは？大きなお世話ながら、そんな心配をすることに。

◆本作の上映は東宝系のシネコンではなく、単館系のシネ・リーブル梅田。私は株主優待券をフルに活用して同劇場に通っているが、ふつうは、じいさん・ばあさんばかりで、若い人はほとんどいない。ところが、今回はギリギリセーフで空席をキープできたが、以降の上映はすべて満席になっていたからビックリ。なるほど、映画通好みのクソ難しい映画ではなく、本作のような大量宣伝される「アメコミもの」を上映すると、若者がこんなに集まることがよくわかった。

もともと、若人は常にアベックか友人連れで、1人だけの鑑賞は少ないし、映画鑑賞とポップコーン購入がセットと思い込んでいるから、ボリボリとうるさい限り。劇場はもうかるから若人大歓迎だろうが、いつも1人で静かにスクリーンを覗いているじいさんには少しうっとうしい。やはり、シネコン系と単館系とでは上映作品の仕分けを徹底させた方がいいのでは？

◆東西冷戦時代のスパイ映画は『寒い国から帰ってきたスパイ』（65年）を代表として、シリアスなものが多かった。本作でも、導入部で描かれるブラック・ウィドウ養成の物語はシリアスだ。そして、『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）や『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）、『共謀家族』（19年）ならぬ、「スパイ家族」とも言うべき父親アレクセイ・ショスタコフ（デヴィッド・ハーバー）と母親メリーナ・ヴォストコフ（レイチェル・ワイズ）、長女ナターシャ（スカーレット・ヨハンソン）、次女エレナ・ペロワ（フローレンス・ピュー）の家族が、導入部に続いて迎える大きな試練のシークエンスもインパクトがある。これは面白そう。しかし、本作のストーリーはどんな展開に？

私がビックリしたのは、母親のメリーナ・ヴォストコフ役をレイチェル・ワイズが演じていたこと。言うまでもなくレイチェル・ワイズは、『女王陛下のお気に入り』（18年）（『シネマ43』25頁）で英国アカデミー賞助演女優賞を受賞した他、『否定と肯定』（16年）（『シネマ41』214頁）や『光をくれた人』（16年）（『シネマ40』239頁）等で素晴らしい演技を見せてくれた美人女優だ。『ナイロビの蜂』（05年）（『シネマ11』285頁）も『マイ・ブルーベリー・ナイツ』（07年）（『シネマ34』368頁）も良かった。そんなレイチェル・ワイズが本作では、冷徹非情な任務に徹するレッドルームの支配者のドレイコフ（レイ・ウィンストン）に忠実な女科学者役を演じているが、それは善玉？ それとも悪玉？

◆また、ナターシャとエレナの父親役のデビッド・ハーバーも『ヴァージニア・ウルフ なんかこわくない』（05年）に出演していた演技派だが、本作前半での家族を守るための父親としての奮闘ぶりは胸に迫るものがある。しかし、後半からの登場は・・・？

意外に本作でウェイトが大きいのがナターシャの妹エレナ・ペロワ役のフローレンス・ピュー。彼女は『ストーリー・オブ・マイライフ/わたしの若草物語』（19年）（『シネマ47』10頁）で第92回アカデミー助演女優賞にノミネートされた演技派だが、本作ラストに予告された続編では主役に抜擢されそうだから、それにも注目！

『共謀家族』では妻子を守るための父親の奮闘がメインだったが、本作は、『万引き家族』や『パラサイト 半地下の家族』の家族と同じように、家族4人それぞれの奮闘ぶりが興味深く描かれるので、それなりにグッド！

2021（令和3）年7月21日記